

東日本大震災・熊本地震 支え合おう!

大介護時代の情報誌

[ベターケア]

Better Care

71
2016
Spring
春

[特集]

これから医療・福祉と こう、つきあおう!

在宅で暮らし続ける「考える市民」が
地域を変える

佐々木淳 [医療法人社団悠翔会 理事長・診療部長]
インタビュー: 町亞聖 [フリーアナウンサー]

増殖する「みま～も」
おおた高齢者見守りネットワーク

地域の市民に開放された空間づくり
脇濱由佳 [下馬デンタルクリニック院長/オリーブの木主宰]

ケアプラン自己作成、
病診連携、ここがおかしい!
島村八重子 [全国マイケアプラン・ネットワーク代表]

「絆」を住民がつくる「地域まるごと」ケア
花戸貴司 [東近江市永源寺診療所所長]

対談
奥村伸二 [アカペラグループ<INSPI>ヴォーカル]
浜田きよ子 [高齢生活研究所所長]

歌と管理栄養士の二足のわらじ



介護
百人百色の
気仙沼市 [宮城県]
藤沢市 [神奈川県]
吉野川市 [徳島県]

医療・介護を核にしなが 助け合い、支え合う「絆」を住民がつくる 「地域まるごと」ケア

花戸貴司 [東近江市永源寺診療所所長]



横になっているAさんを起きて活動させようと、話しかける花戸さん。右は看護師さん。

Aさんの場合

症例：89歳 女性

疾患：心不全、不整脈など、認知症はなし

家族：息子と二人暮らし

先日、息子が留守の間に玄関の鍵を締めようとして土間で転倒。以来、動けない、ご飯が食べられない、と、地域の民生委員さんから連絡があり。

骨折かな、往診に何うと、隣のおばあちゃんがおはぎを持ってお見舞いに来られていました。診察すると、腰の痛みは骨折ではなく、腎盂腎炎のようで抗生物質の点滴で良くなりそうです。ご飯が食べられなかったのは、食べるものがなかったようです…。

現在、往診とヘルパーさんの回数を増やしてもらうなどして対応中。

すぐに救急車を呼ぶのではなく、地域の人たちが「きずな貯金」で支え合う。とてもいい見守りシステムです。

(追記) 私も往診の帰りにおはぎをいただきました(笑)

89歳女性 心不全、不整脈あり

訪問診療をする先々で、折にふれて「ご飯が食べられなくなったらどうしたい？」と尋ねている花戸貴司さんのことは、本誌68号でご著書とともに紹介した。その花戸さんの訪問診療に同行させていただいた。

雪は溶けたものの、風はまだ寒い3月半ば。滋賀県東部、東近江^{おうみ}市にある診療所の近辺は住宅と畑や田んぼが連なるが、診療地域は山間部も多い。

山から川に落ちる急峻な山腹の一部を削ってつくられた細い道路。その両脇に家が並ぶ。川側の家には、幅の狭い急な階段を10段近く

※三方よし研究会

東近江市、近江八幡市、日野町、竜王町からなる人口23万人の滋賀県東近江医療圏で、医療中心に始まり、やがて薬局・歯科医師・介護などの医療・介護専門職や、消防署など関係機関、そして地域のことを考える一般市民も参加するようになった研究会。原則毎月第3木曜の18時30分から2時間。事例研究を中心に、小グループでの活発な議論を展開。

も降りなければ行かれない。その一軒の玄関で「Aさん、花戸です。入るよ」と、看護師を伴い、花戸さんは返事も待たずに入っていく。入る前に二人は、Aさんの情報を玄関前で確認しあっていた。

薄暗い玄関から居間を抜け、奥の寝室でベッドに横になっているAさん。「具合はどう？」

「ご飯、食べた？」という花戸さんに「ご飯は食べたが、寝られんのが困る」とAさん。「昼間寝てばかりいるから、夜寝られないんだよ」

「でも、起きたら足が痛いし、腰も痛い」と会話を交わしながら、手早く、診察を進める。

本が大好きなAさんには、市の移動図書館の職員が好みを見つくるって、月に1回、20冊ほどを運んでくれる。また、壁には一日分ずつに仕分けされ、間違いなく飲めるよう、台紙に貼った薬が掛かる。診療所近くの薬局から訪問薬剤師が手づくりの薬飾り（！）をもってきて、置いていったものだ。

「こういうことすべてが、ご本人の安否確認でもあり、社会との接点にもなっているんですよ」と花戸さんが教えてくれる。

実は花戸さんは、三方よし研究会のメンバー

ングリストで、表のようなAさんの症例紹介をしている。要は、痛さを理由に動かないことから、食事もきちんととれず、便秘が悪化し、それが腰痛に結びつく、という負の連鎖を断ち切るために、とにかく今まで通りデイサービスに出かけなさい、動き出せばリハビリにもなり、食欲も出て便秘も解消し、腰痛も消える、ということがポイントだ。

「デイに行ったらいいことあるかね」という問いに「デイに行ったら入院せんでもいい。入院は点滴ばかりで嫌だというてたろう？」

言うこと聞かんとよくならない」と、花戸さんは半ば脅して（！）いる。ちゃんと食べてちゃんと動いてちゃんと便を出す。それが大切といったあと「何かあったらまたいうて。また来るし」と優しい声で付け加え、Aさん宅を後にした。

お隣に行くには、一度、上の道路に戻る。そこで、Aさんの見守り隊長（！）であるご近所さんに出会った。花戸さんとご近所さんは早速、Aさんの情報共有タイム。「じゃあ、またよろしくお願いします」とお隣さんにご挨拶をして、2軒ほど隣のBさん宅へ。ここもまたやはり急な階段を下りる。

玄関前での情報確認と、「Bさん、入るね」の声かけは、同じ。大きなガラス窓の先のベ

84歳男性 糖尿病 認知症

ランダには、ネコが2匹。さて、禁煙を言い渡されたはずなのに、灰皿は文字通り吸い殻の山。30年前から放置してきた糖尿病も。でも、日本酒の大きな紙パックにコップもあり

ますよ。糖尿病由来の足先の血流不全で、足の痛みを訴え、切断こそ免かれたものの入院治療のち、自宅に退院してきて3カ月。

「Bさん、家に帰ってきてよかったな」やっぱ、家がいちばんよろしですわ」「でも、お酒飲んだらまた病院へ逆戻りになるよ」「昼は、飲みません！ 毎晩晩酌に1杯、飲むだけで

す」…。



食事を運んだり顔を見にいたり、Aさんの暮らしを支えているご近所さんとも情報交換。

週末に交代で戻ってくる二人の息子、訪問看護、訪問介護、訪問診療に加え、ここでもご近所さんをも巻き込んで、認知症が進行しつつある一人暮らしを支えている。

「なにか困ったことはない？」「自分でも外もちょいちょい歩いていきます。ヘルパーさんも来てくれるし、なにも困っていません」「デイに行つて、お風呂入っている？ 3日に1遍かな？」「家で自分で入っています。もつと入ったほうがよろしいですか？」

医師が相手のときは非常に言葉も態度も丁寧。「80歳までしっかり働いて、動き倒し



糖尿病のBさんの部屋には、灰皿からあふれんばかりの吸い殻と、日本酒の2リットルパック。

てきましたな。80まで、医者顔は全然、知らん」と豪快に笑う。

この暮らしを支えているご近所の力の一つがボランティアグループ「絆」。ちょっと困った人に、ちょっとした手助け、見守り、安心を届ける。見守りや話し相手は無料、病院の送迎、車での買い物付き添いなど、現にガソリン代など、費用がかかる場合は有料。お互いさまの心に、ほんの少し、現代風アレンジをつけたわけだ。

「こんな話をする、田舎だからできるという人がいます。しかし、15年前にぼくがこの診療所に来たころは、家で死にたいという人も少なく、みんなで支え合うという仕組みもなかった。必要だからみんなで考えて、つくってきたんです」

会長の小串輝男医師とともに「三方よし研究会」を率いて、地域まるごとの新しい地域づくりを進めている花戸さん。そこで目指すのが医療や介護・福祉も含んだ「地域まるごとケアシステム」。専門職が提供するサービスだけでなく、家族やご近所さん、行政やお店の人、みんなみんな一緒につくり出す。集まるとの支え合いが、ここでは、少しずつ実現し、ますます充実していつている。

はなと・たかし ●1970年、滋賀県生まれ。95年、自治医科大学卒業後、湖北総合病院などで小児科医として活躍。2000年以來現職。東近江永源寺東部出張診療所所長も兼ねる。「三方よし研究会」実行委員長。

東近江市永源寺診療所

〒527-0231 滋賀県東近江市山上町1352
Tel: 0748-27-1160
fax: 0748-27-0309
診療時間: 8:30 ~ 11:30 16:00 ~ 18:00
休診: 水・木・金・土曜の午後 / 日曜 / 祝日



この日の訪問診療には〈福祉と医療・現場と政策をつなぐ「えにし」ネット〉を主宰する大熊由紀子さんもご一緒